

# 小児科だより vol.91

## 4月からすこし変わる予防接種

2024.4.1 発行

こんにちは。暖かい日が徐々に増え、この便りが皆様のもとに届くころには桜の季節が到来し、新入園や新入学といったシーズンに入っているのではないのでしょうか。現在、小児科外来では、例年この時期に流行するヒトメタニューモウイルス感染症、ライノウイルス感染症など、特異的な症状を持つ患者さんを見かけるようになってきました。咳や鼻水が長く続き、咳込み嘔吐や喘鳴（ゼイゼイ、ヒューヒュー）を伴うことがあります。無事に就園や就学を迎えることが出来るように、この機会に手洗いやうがいとといった、基本的な感染症対策を再確認しましょう。



今月の小児科だよりは、2024年の4月から予防接種に関して、いくつか変更される点があるため、お話しさせていただきます。

一つ目は、『5種混合ワクチン』の定期接種への導入により、これまで4種混合ワクチン、Hib ワクチンと2種類のワクチン（肺炎球菌ワクチンやB型肝炎ワクチン、ロタウイルスワクチンなどを同時に接種することも多いのですが）を接種する必要がありましたが、1種類で済むようになります。1年前の小児科だよりでも触れましたが、2023年4月から4種混合ワクチンが生後2か月から接種開始となっており、この5種混合ワクチンも生後2か月からの開始を想定しています。これまでは皮下接種のみとされていた接種部位が、皮下接種もしくは筋肉内接種となりました。予防接種の筋肉内注射に関しても、過去に（小児科だより Vol.54）その有効性や安全性などについて触れさせていただいておりますので、ご参照ください。また交接種（4種混合とHib ワクチンを別のワクチンとして接種してきたお子さんが、5種混合を追加接種するなど）については、現時点では原則同一のワクチンで接種を行うとされていますが、転居や自治体ごとの予防接種採用有無など様々なケースが想定されるため、交接種も可能となるような規定が設けられています。

二つ目は、15価肺炎球菌ワクチンの定期接種化です。背景として、これまで13価の肺炎球菌ワクチンによって侵襲性肺炎球菌感染症の総発生数の減少が維持されてきましたが、13価ワクチンではカバーされない血清型の割合が増加していることがあります。15価ワクチンの有効性や安全性が確認されて、薬事承認されたため4月から定期接種に導入されることになりました。15価肺炎球菌ワクチンも筋肉内接種が可能となっています。また交接種は認められているため、これまで13価ワクチンを接種してきた方も15価ワクチンへの切り替えも可能となっています。詳細につきましては、小児科外来でご相談ください。